

先生のご理解とご援助に心から感謝申し上げたい。

先日の丘門会懇親会の挨拶の際、壇上からの諸先生の眺めは壯觀であったが、改めて大所帶で、60歳という半世紀を越える年齢の差と専門性の違いなどに気づかされた。比較的似た価値観をもつ30数人程度で濃密に交流を重ねていた当時の丘門会を知る者として、今後の丘門会の在り方に思うとき、思い出されたのは、「武者小路実篤」が野菜・カボチャと共に描いた「和して同ぜず」という色紙である。解説書によると、この論語の言葉は、

実篤の座右の銘で、囁み碎いて言えば、「君は君、我は我也、されど仲よき」とのこと、これは近代人の個人関係、及び全人類の関係を実に美しく表現した言葉であると記してある。

今後、丘門会では、会員の世代間格差、多様な専門性、価値観、医局歴などの差を認め合いながらの「仲良き」会として発展されることを祈って感謝の言葉としたい。

お祝いを頂き有り難う御座いました。

(かわむら たかひろ)



丘門会入会50周年

津久江 一郎

ずっと以前、小生等が駆け出しの頃は“この道20年”とて、同一カ所で勤務した会員を皆でお祝いをし、年一度の総会の場で教授から、会から誉め称えられていたように思う。この頃は単に“すごい事だ”と感心したものである。

今になって丘門会という同志の集いの永続性を目指した初代小沼十寸穂教授の偉大さと、これを信じて集まり継続してきた会員の諸氏に敬意を表したい。

ところがである。今回は何と入会50周年とか、自身のことである。このテンポの早い時世にびっくりすると同時に自由職という有り難さを感じる。

とは言え、単にいつの間にか時が経たわけ

ではない。山あり谷あり色々な事があった。

古い資料を探していたら別紙のようなものが出でた。ネブラスカ州の名誉市民章である。恥ずかしいのであまりオープンにしていなかった。これはかつて日本代表に選ばれ厚生省より派遣という形で日本精神科病院協会より3名、自治体病院より2名の計5名で、日米精神保健国際交流プロジェクトに参加した時のものである。

まずアメリカの5つの州の精神科医療システム及び施設を視察して回った。

“ジョイントミーティングはエレベーター“PH”ボタンを押せ”

日米両国の関係者が集まって、最後のハイライトはニューヨークのサミットホテルの最

上階のペントハウスで行われた。両国からの冒頭の挨拶、経過報告、ディスカッションの後、いつものパターンで共同コミュニケを出して終えた。

視察中にアメリカの中心というか、西部のヘソ的存在のネブラスカ州にも訪れた。日本と同じぐらいの広さを持つことを誇りとする程の牛とトウモロコシ畑の州であり、日本人

が珍しかったせいか、われわれが眞面目であったからか、ネブラスカ州の名誉市民の証を全員が頂戴したのであった。

小生にとって國のため、会員のため一生懸命心骨働いていた頃の思い出です。

(つくえ いちろう：瀬野川病院)

